



春頌

文政十





春頌

栂の戸に初夏

不塞

らんし 残りも

青柳や表も

いづる(ほ)の

さるる

地又ありきよき

句みん梅 梅府

くつとるれ色

春の雪初

大根ぶろー哉、

かきうき、此かきよ

森て居る其日乳、

ふいかすむ生帆や 餐良花

松のおおめ比

うくしほや

白めす乃き菜

え日や水の忍い袴幼腹赤一之
何もしるく石場此

石小研

う南

煉掃やいつも一回し後乃伊勢

半々笑梅よ日頃の糖粒味噌 子輔

花元の海へ出る来々茶子春 牛庖

おしるふ了世お初夷禰 牛車

二挺つゝと茶敷担き花く 牛長

茶也や帆柱かきききんは 情我

落のさう似るおれあり福壽竹

豆荷おねも一色二 ハモ 兵

初雀子代ちよくの八子乳 酒天

七種や隣をを賀の打

四

昨日より度と續てぬ人々、
大黒の若水より押合ぬ 来先
等に又起され了るる口、
親方の内此餅搗く角力哉、
一年や先元日の智恵袋 角字
梅 暗う杉田三里に如被氣

川とや芝居の心柱本賣、
美とよ只夢を君う渡しぬ 東蟻
〜〜〜 雛もけり糸もせう、
川とや孟宗林を親の爲、
〜〜〜 福寿草 其色
梅とや松下障子も皆り、
五

さるやがね日向の肉、
おき友くくくく春 萬丈
うく鳥の鳴くや海の中、
燦との近江の海大又年、
え目やあつては紋の着衣始 楚糠
一灰を死して左美木の精をし、

くくくニ殊判吉くくくい、
くあやも 知るやま公の中柱 為 柱
枵う升えりくくくをきくくく、
ニ子出来てふこの山くくく後なる、

鏡こころ松島

哥山

ふゆきこころみあき

條の升海うみと認と春雪裏
白しろい雪ゆき白しろ袋ふくろう心こころい、

お髪かみととて師し走はしり一人ひとりあ、

二寸にすんかき出でると立たたり福ふく壽じゆ子こ雪ゆき子こ

紅べに梅うめや増まくくうう了り十寸じゆすん鏡かみ、

升のぼり婦め人に條の子こかかて名なか立た友とも、

若わ水みづや鼓つづみの音ね此こゝ冬ふゆをを見み餅もち鏡かみ

京きやう入いハハ女に次つぎ柳やなぎハハもも柳やなぎ、

七、

表の轉に目出度番其也言の昔、
蓬蓬其は雀のせりさるいよ其鏡
梅つんがふりう二入小照り、
様掃や母と園屋へ泊りけ、
三足の一敷先へ初鳥升尾
梅う、やひ燃消てくみ止、

年の暮祝よ葎の多し、
和衣の浦へ去るるあはれさすこ
ゆきをに柳うよとえぬりきり、
甲子う年の市もあはれさすこ
祝の祈りよとて人達水後ふ玉
袖にゆや袖よあ前此うハ乃夜
ハ

汝^もしく大^はの^り庭^に寔^に、
お降^りや^や傘^をか^ける^るの^は美^松
土^佐の^春響^のけ^り尺^余り、
元^もい^の室^をか^きて^やい^やう、
え^りと^ぬく^ハせ^しれ^雀を^せ秋^武
俣^師西^の禿^まま^れし、

大^仏の^鼻に^穴を^焼乃^并、
下^馬れ^て鳥^をか^りて^はい^はり
強^く花^をお^きて^削け^千歳^以
元^日や^釣い^る浅^美は^袋雪^傘
か^すも^をえ^かつ^鳥は^あま^れれ^知足^傘
出^初や^二十^一文^字も^集て^も
九^一水

つよもてむかふか柳うす、
まらや田芥川芥はし川、
神の妻は石谷は楮はまき登 文亭
弁女市ふまきまき初子の市、
枝木て立川の名やまらふれ、
驥の徳は具る名舞は初観社英

か〜誼ま〜やあ〜笑され、
あ日の稚ふやいのる、
ま〜初〜福〜い〜福寿中 花友
ハ勝の生初名〜仲町は、
此中〜忘〜年〜お〜る、
初名中一島鳥二島仲
十以文

六花く年始よおまわつらう、
二挺櫓七ありく後て大晦日、
くまの尻灰よ分あまうり雪 萬籟
細きもや漏ぬ白魚一二寸、
魚乞や川なを星う鼻の先、
其厨や既よ灰もおぬ敷吐峯

神代の質恵も

世辭

今も雜煮り丸

そりや江戸に

垣根に建仁寺

一の香斗々

持心瓶の南

芥子油の香斗々色煙一有
元日如舟の灰也又古部
荒猫乃香斗々や付瓦家根

何元々く先と後方又向ひ多 柵宇

今う落子様と足や露くく
瓜元々も用此教之年乃元

糸畑や我のハる女家 肆社月

土蒸子店ハるてまめて公色 萬山

七種とすまき一斗元

餅もや今もあるはし又六日、
新屋と上つたがと年始の八
景廻し羨い男もさうり多
徒然と出まじさき心年のれ
春もや初瀬の隅は華すまひ吐
と忘る谷も二夜は冴ひきり

君う代や若菜摘はまぐとハ杉二
翁也世松より出く雀乃形晴雨
有松茶煎豆も火もくさるる
年の市神も仏もいりいれ
心も交りそのり能知紋袴竹塙
移るがし柳も春る往来うね

粥杖や筑上祭の綱かへし、
日く又日に世の世は赤心
元日や梅咲匂よ以成筋、
やうくと柳をくくと梅の花、
元次へ中絶し武士ハ春一馬
待たるるを今戸の梅乃詠、

蓬草や根は只居ぬ茶乃詠は、
元日と年や日かろくをさいつと
猫の意多をかしくあはる、
幸若子先回ふ書乃長詠は、
あやう紋布と持て這入る山住
才女の花満堂にぬ陰子一の羽

右凡そを糶ハセ賣昔今も美、
元日や晴て牡丹も咲く和
曉
津本々の家元梅の香柳の、
豆荷や町ハ立横十文字、
福と向たりもらも福藁也 東居
香梅や豆汁といふまゝ

人形乃をてい、美をく、
福壽中袂を意し、持し、
院女の舞へ今も咲もり、
欲するもれ福と肉く、
美方々やう大津へ出ても、
る下年の垢かりもふし出る
十五

先七かく
茶の外のり
すま紅
至分
梅
ち梅日多と考と
野
知

元日此梅と年
吾伯子う其此
七力以考ふ
号七
青
所

蓬子来より斗く語れ等の娘
さよハとも田表れ三乃着更始
貸餅やも角宿ハまゝ戸板

正月は来す海しり 因 函 月 齋
梅をきしき 法華經の古はる

何れ物も年此かけ乃綿匠中
あし玉乃帛子均きき赤いん 匣 変
芽子子びくくきりきり 春の肉
茶子乃大あ日を正見くれ

文政十丁亥

